
雪解けの足跡・

芳雪うめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪解けの足跡・

【Nコード】

N5270K

【作者名】

芳雪うめ

【あらすじ】

江戸の長屋に住む浪人の清次郎と俸手振りの喜市のちょっと不思議な話。安政五年一月の出来事。

清次郎が連れ帰った迷子の男子はどこか不思議な雰囲気で・・・シリーズ二作目です。

その一

通りからは、人々の賑わいが引つ切り無しに聞こえて来ていて、獅子舞がいるのだろうか、笛の音と子供たちの喚声がさざなみの様に沸いている。

長屋住まいで棒手振りの喜市は、部屋に寝転んで煙管をくゆらせると、天井を見つめぼうつとまどろんでいた。

そのさなか、長屋の外から雪の融けて湿った土を踏む音がし、それが部屋の前でぴたりと止まる。

「喜市殿、いるか」

声の主を悟った喜市は

「おりません」

と半ば茶化したように返すと、煙をゆつくりと一息吐いた。
すると何やら戸外でぶつぶつと文句を言っている声の主にけらけらと笑うと、ようやく立ち上がって戸口へ出た。

「たまには普通に出たって良さそうなものだ」
戸を開けるなり、声の主である清次郎は眉間に少ししわを寄せて言った。

清次郎は喜市とは同じ長屋の向かいに住む今は無役のお侍で、年も近く何かと係わり合いになることが多い間柄だ。

「ところで。なんだ、それは」

笑いをひそめた喜市が視線をちらりと清次郎の横へと逸らした。
そこにいるのは、見たところ十に届かぬ位の歳で少年であろうか。
深い藍の着物には白い格子がかかっていて仕立も良く、どうにもしていた頬被りの田舎くささには似合わなかった。

ふつくらとした頬と小さな口は子供らしい可愛さを持っていたが、まんまるい目の奥はなぜか無邪気さとは縁遠い大人びた色を浮かべ

ていた。

総じてどこか奇妙な男子である。

「いや、吉婆に頼まれて千住の宿まで遣いに行つたのだが、歸りにこの男子に会つたのだ。

親と行商に來たのだが、はぐれて道に迷つたらしく、腹も空かせているというので連れ歸つた。

何、行商の通る道に迷子の知らせをいくつか張り出しておいたから、大丈夫だろう。奉行所にも届出しておいたしな。」

にこやかに言う様に喜市は、ふうん、と氣のない相槌をすると、手にした煙管で地面をぴしりと指し示した。

「おつかさんは鍋にでもされちまつたのかい」

そう言つて足元を指された男子はまんまるい目をさらに見開いたが、清次郎は何事か分からない様子で喜市と男子を交互に見た。

「清次郎殿、ご覧よ。これが人の足跡かねえ」

言われて清次郎は直ぐさま煙管の指す先を目で追いかけると、なるほど、雪解けで柔らかくなつた道に今し方付いた清次郎の足跡の横には、およそ人間の子供のものとは思いがたい、小さな獣らしき梅の文様のような足跡が付いていた。

男子は喜市と睨み合つたまま、髪の毛をわずかに峙てじりじりと後退りを始めた。

弾かれる様にぱつと走り出そうとした刹那、清次郎は男子の細いその腕をしっかりと捕らえていた。

思いがけないことに男子は驚いて振り向くと、必死にその腕を振り払おうともがいたが、清次郎が空いた手をすつと上げると思わず首を引っ込めた。

一つや二つぶたれるのかと思つたのだろう。

しかし清次郎は上げた手を柔らかく男子の頭に置き、二三度あやすように叩くと

「腹が減っているのだろう」
と微笑みかけた。

清次郎の素早さと、男子を引き止めたことに驚いたのは喜市も同じだったが、その様子を見ると直ぐに慣れた様子でため息を吐き、緩んだ縞の着物の襟を正して二人を招きいれた。

その二

ひんやりとした部屋の中に漂う煙草の匂いの合間を縫って、隅に積まれた椿の花と枝から、土の香りと花の香りが差し込んでくる。

その傍らには決して質がいいとは言えない紙に、墨一色の濃淡で描かれた椿が優雅に横たわっていた。

鼻屑目に見ずとも見事に思える腕前に感心し、ものめずらしげにその絵を眺めていると、後ろに隠れたようになっていた男子も、じろじろと一緒にあってそれを見ていた。

喜市はその視線に気づくと直ぐに、苦い顔をして紙をくしゃりと握り、隅にほうって火鉢を掻いた。

男子は少しおびえた様子を見せた後、清次郎の撫でる手に安心したのか促されるままに恐る恐る中に足を入れる。

更に引き入れられて、畳の上に腰を下ろしてもなお男子は未だ喜市を警戒しているらしく、腰が浮つき、いつでも逃げられるようにしているようだった。

じつと見つめてくるどんぐり眼に口角を上げて返すと、喜市は布団を隠している屏風をどかし、小さな二段の引き出しのついた箱から紙の包みを取り出した。

「腹の足しにはならんだろうが」

と言いながらよこしたそれを、男子は喜市の目をまじまじと見ながらそつと受け取り、包みの口を握り締めて押し黙っている。

「金平糖だよ」

喜市は先に目をそらすと、こん、と煙管の灰を火鉢に落とし、葉を詰めながら言う。

しかし男子はいまだ喜市の目をじつくりと見つめたままで紙包みをあけると、すぐにそこに入っていた白く小さな金平糖に目を奪われ

てしまった。

途端に男子はひよいひよいと口に運び、瞬く間にそれは少なくなっていく。

「お前、名前は」

喜市が聞くと、傍らで男子の様子を呆気に取られて見ていた清次郎は、ふと気を戻して代わりに答えた。

「侘助というのだそうだ。しかし狸というのは本当なのかい。こんなに上手く化けられるものなのかね」

以前生霊と出会ったことがあるからか、清次郎は言葉とは裏腹に大した驚きもないようだった。

それよりも、そんなこともあるのかと納得をしているような口ぶりである。

清次郎の言葉に、侘助は金平糖を頬張りながらうなづいた。

ふうん、といった感じで喜市が火鉢の炭で煙管に火をつけ、部屋には一層濃い煙草のにおいが立ち込める。

「で、こいつが狸なのはいいとして、清次郎殿は何で俺のところにきたのだ」

聞くと清次郎は恥ずかしそうに

「俺のところの火鉢が割れたので」

と頬を掻きながら答えた。

なるほど、直すにも買うにも事欠く清次郎の暮らしならば仕様がな
いし、その日暮らしはお互い様なので、喜市は別に攻める気もなく
「そりゃあ難儀だな」とうなずくばかりだった。

それよりも新春とはいえ凍て付くような寒さの中、清次郎に何かあ
ってもそれは困る。

問題はもう一方である。

「それで、侘助は何で付いて来たんだ」

すっかり食べつくした金平糖の包みをくしゃりと握ると、ただ短く

「腹が減つたのだ」

とだけ答えると、また喜市の目をじつと見つめ始めた。

確かに、昨年の夏の天候の悪さはあつたがそれでも市場や店には、いつもと同じくらいの品が並んでいた。

それは獣の住む所とて、変わらないだろう冬への蓄えをするには十分だつたはずだ。

喜市がそれを言うより早く、悟つたように侘助は口にした。

「俺らの住んでたところは、人に畑と店にされちまつたよ。引越そうにも、隣は狐の縄張りだ。通ることはできん。

それに何だかやたらに人がいて、化けられないやつらは皆狩られた。化けられるやつだけで散り散りに逃げて出たんだ。」

余りに淡々と言つてのける侘助に、喜市と清次郎は顔を見合わせた。

その三

侘助は清次郎が寺からもらった芋やら漬物やら、吉婆からのお裾分けの玄米の握り飯やらを一通り平らげると、少しうとうとした後にぐっすりと眠ってしまった。

そうすればまるで小さな嵐が去ったようで、二人はようやくいつもの様に茶を飲み交わす。

「一体何だかねえ。起きたら帰るだろうかね」

喜市は相変わらず煙管を指に挟んで頬杖を付き、小さく寝息を上げている侘助を眺めていたが、気のせいか目許と口許が僅かに緩んで見えた。

掻いた火鉢の中で、炭がぱちりと音を立てる。

「ところで喜市殿、良くこの子の足跡がおかしなことに気付いたな。」

喜市はふと笑みを漏らすと、再び火箸で炭を持ち上げてに説いた。行商に付いて来た割に草鞋が新しいこと。着物が良いものでありすぎることや、寒風の中行き来するにしては、頬も手も足も綺麗すぎると言うことがおかしかったのだ、と言うことらしい。

「それで奇妙に思つて足跡みたら、あれだ。清次郎殿は何でも信じすぎるんだよ。ちょっとは改めたほうがいいんじゃないかね。」

「しかしそれに喜市殿はなぜ驚かぬのか。この前もそうであつた。」説明が終わるなり清次郎は矢継ぎ早に聞き、今の忠告など一切気にも止めていない様に目をららんと輝かせていた。

「驚いたよ」

喜市は呆れたため息をつきながらもそうと答えると、それにしては冷静だなんだと言って、清次郎は感心している。

それが何だか大げさであるように思えた喜市は気まずさを誤魔化すように額をかくと話を始めた。

「別に冷静なわけじゃない。異様だが異常ではないだけの話だよ。俺の里は山の奥で、化け物や幽霊、そんな言い伝えはごろごろしてたもんだよ」

煙が一息もうもつと吐かれると、喜市は椿の山に目を移し、まどろみかける目で頭の中の記憶を追い始めた。

「幼馴染に出雲ってやつがいてねえ。小さい頃は山遊びに連れまわされたものだ。

天狗だのなんだの信じてるやつで、天狗に会ったという話をしたら里の子供に馬鹿にされて、それから一言もその話は話さなくなつたよ。」

火鉢に火箸を差し込むと、喜市はひとつあくびをこさえた。

のんびりとしてみせる喜市とは裏腹に、清次郎は少し驚いていた。酒も入っていないのに、こんなに自分のことを饒舌に話す喜市は初めてだし、それどころか里の話など、むしろ江戸の出でないことから始めて聞いたのだ。

しかしそんな清次郎の様子も気づかぬように、喜市は追って出るあくびをかみ殺して話を続ける。

「でもね、俺がねあいつの帰りが遅いのを探しに山に入ったら、あいつは呆然と立っていて、「天狗だ」といってへたり込んだまま動かなかつたんだ。そりやもうすっかりした口ぶりでさ。

寝ぼけたなんざ露とも思えぬほどだったよ。それにね、何よりあいつは人をたばかるようなやつじゃあなかつたんだ」

「御主も見たのか、天狗を」

清次郎は息を吞んで聞いた。

喜市は境目を彷徨っていた意識と視線を漸くこちらに戻すと、わず

かに笑い目を伏せる。

「残念ながら、なかつたねえ。」

はき捨てた言葉が余りに悲しげだったので、清次郎は俄かに聞いたことを後悔したが、さして気にもしていない様子で喜市は話を続ける。

「でもね、そいつは子供のくせに真面目で頑固だけど、厄介ことも進んで請け負うお人よしで。しかし、そうだなあ、例えるなら青竹のような無垢で凜然とした子供だったよ。きっとそういう人間は、選ばれるんだなと幼心に思ったものだよ。」

そう言つて喜市は清次郎の姿をぐるり一回り見ると

「ここに来てそれが間違つていないとわかつたがね。」
と再び笑つた。

その笑いが含んでいる意味を捉えきれない清次郎は、何のことかと目をぱちくりさせていたが、喜市の妙に嬉しそうな様を見て、やつと肩を下ろした。

傍らでは侘助の穏やかな寝息が規則正しく往復していた。

その四

夜中、侘助が目を覚ますと隣には喜市が一つ布団の上に寄り添って寝ていた。

外では凍える風の吹きぬける音と、凍てついた地面をからからと転げる枝葉の音がする。

喜市は自分の掻い巻きの中に引き込むようにしているものだから、もがくようにして漸く首を出すと、そのままきよきよと目だけで辺りを見回したのだが、清次郎の姿はどこにも見当たらなかった。清次郎に何を求めるわけでもなかったが、見透かすように見る喜市はどうにも油断がならぬ気がしてならないのだ。

「清次郎殿なら自分のところに戻ったよ」

目を瞑ったままの喜市が答える。微かな衣擦れの音と、布団の中に忍び込む冷気で目を覚ましたようで、侘助の方に向き直るとずれた掻い巻きをかけなおしてやった。

部屋の中は息の白さがしばらく退かぬほどに冷え込んでいたが、薄っぺら委布団の肌触りと、喜市の体の暖かさが心地よく、侘助はとも逃げる気にはならなかった。

吸った息の寒さに二人とも少し目が冴えたようで、お互いの動きを知らず探るような妙な時間が流れた。肌の産毛が、ぴりぴりとするような感覚が走る。

喜市が話を切り出したのは、そのせいだったかもしれない。

「侘助よ。天狗ってのはいるのかい。」

侘助は上を向いて二、三度瞬きをすると、そろりと喜市を見た。

「俺の里のやつはね、天狗に会ったんだそうだ。皆信じなかったが、

俺は羨ましくてねえ。そいつが会ったって言う場所まで、一人で何度も行っただが、終ぞ会うことは出来なかった。心がけの問題かねえ。」

侘助はじいっと、まるで独り言のようにひとつひとつ話す喜市を見ていて、喜市はそんな侘助に気づき、「なんてな」と言っただけのように少し笑った。

しかし侘助の方は別段笑いもせず、天井に顔を向けなおすと目を閉じ、またつい先ほどと同じ様にしんとした空気が部屋の中に根を下ろした。

「心の問題ではない」

空気をぱつきりと割って、突然侘助が口を開く。うとうととしていた喜一は驚いて目を見開いて侘助を見た。

「俺たちはいつだって狸同士で話している。人間が近くにいたらそんなものはかまわない。聞こえやしないんだから。」

そう言う侘助はやはり到底子供のそれではないまなざしである。

「お前たちの鳴き声の事か」

「お前は、この音を何だと思う。」

侘助は喜市の疑問に耳も傾けず、逆に問いかけた。

言われて耳を澄ますと、外を空風のぴゅうぴゅうと吹き抜ける音が聞こえる。

いかし神妙な顔でしばらくそれを聞いていても、それ以外は何の音も聞こえなかった。

「風の音しか聞こえないがね」

答える喜市を見ていた侘助は目を閉じると戸口の方に顔を向ける。

「これは風の音ではない。風の神が騒ぎながら走り抜ける声だ。」
そんなばかな、といわんばかりに喜市の眉間に皺が寄ったが、それをちらりと見てもなお侘助は平然と話を続けた。

「花が匂いを持つのは花の精が他の花に懸想をするからだ。春風に花の匂いが混じるのは、花の恋文を届けているからだ。

水が凍るのは、寒さで水の精達が固く抱き合うからだし、土の布団を被った少し利口なそれが、お前たちの言う霜柱だ。お前たちが見えなくても、色々な者が常に息づいている。

お前たちは八百万の神と、勝手に名をつけたようだがな。

人とそれらが共に暮らす必要があったときは見えていたし、知っていたはずなんだよ。」

言い終わるとまた天井を向き、侘助は目を閉じた。

「ただ、お前たちに見聞きする必要がないだけだ。いつだって俺たちは変わらない。現に俺はお前の言うように、狸に違いない」

そう言うともぞもぞと布団に深くもぐりこみ、寝る算段を整えた。

侘助の言う話は良くわかる。しかし、自分は少なくとも天狗を信じていたし、見たいとも思った。幼馴染の疑いを晴らすにはその必要があるとも思っていた。

だからそんな自分に何故天狗が見えなかったのか、腑に落ちなかった。

しかしもうすやすやと寝息を立てている侘助に、もうそれ以上聞くのははばかられた。

仕方なく自らも掻い巻きの中にうずくまり耳を澄ますと、まだ外を風がびゅうびゅうと駆け抜けていたが、不思議と喜市は隙間風の冷たさが気にならなかった。

それより、往来や小道を賑やかに行く風を少し愛しくも思っていた。

その五

迎えた翌朝の空は抜けるようで、冷え込みを一層強めていた。土間から無遠慮に上がりこむ冷たい空気は喜市の寢床近くまで張っている。

そんな寒さに起こされて渋々喜市が目を覚ますと、侘助はすっかり自分の衣服を整え、濃い湯気上げる白湯を啜っていた。

部屋は侘助が傍らに火鉢置き中を掻いてくれたおかげらしく、いつもよりほんの少しだけ暖かい。

土間に向けていた背中が、起き上がった途端に解けるように暖かさを吸い取っていく。

「俺にも一つ入れてくれるかい」

あくびをこさえながら言う喜市に答えて、侘助は火鉢の脇の盆を指差した。

そこにはもうたつぷりと湯気上げる湯呑みが乗っていて、まだ寝ぼけ眼の喜市を誘っていた。

「はあ、俺が起きるのを分かってたみたいだねえ」

感心しながら布団を抜けると、上にかけていた綿入りの掻い巻きを侘助の体にかけてやった。部屋の寒さは火鉢があるとはいえ、少し離れれば肌がぴりぴりするようで、小さな体にはおそろく辛いだろうと思つてのことだったが、侘助は小さな手でぺいと喜市の手を払う。

「寒さに弱くては獣は勤まらぬ。人の方が寒かろう。俺は無用だ」
喜市は口をむうとわざとらしく曲げ「可愛くないねえ」と笑つて、それでもと侘助に着物をかけ直すと、向かいに腰を下ろして白湯をすすった。

すると突然、どんと強く戸を叩く音が響く。

「喜市、いるかい。店の買出し手伝ってくれろ」

少ししゃがれた、太く力強い女の声がすると、喜市は参ったように手で顔を覆い、そのまま人差し指を立てて、声を出さぬよう佗助に示した。

女の声を聞きつつ、素早く且つ音がせぬように小窓を開け草鞋を懷に隠し、火鉢の下のほうを持ってそろそろと屏風の後ろに隠れて、佗助にも手招きをする。

狭い屏風の裏で二人は火鉢を真ん中にはさんで向かい合い、這うように身をかがめた。

それとほぼ同時に戸を叩く音がやみ、突然ぱしりと音を立てる。女は戸を開けて部屋の中に顔をいれぐいと見回すと、草鞋がないのと小窓のあいているのを見つけ

「逃げたな」

とか何とかぶつぶつ言いながら、戸を閉めて行ってしまった。

どうやら窓を開けていたせいで、目がそちらに逸れたようで気づかれずにすんだ二人は、しばらくした後でふうと大きく息を吐いて背伸びをし、屏風の裏から抜け出た。

念のためにそろそろと火鉢を置くと、小窓も草鞋も元のように戻した。

佗助は目をぱちくりさせて、不思議そうに喜市を見ている。

「いやあ、あのおつかさんにつかまると、腰が抜けるほど荷物を持たされるんでね。」

喜市はそう言って笑って見せたが、佗助はその顔の中を一つも動かさずに背をむけ

「同じことだ」

と口にした。

「何がだい」

「人に好みがあるように、俺たちにだって好みがある。大半の人と異なるものは、人との関わりを好まない。祭ってみたり、住む場所を追ってみたり、人は俺たちに些か勝手が過ぎるからな。」

喜市に背を向けた小さな体の侘助の言葉は、筋を読むように冷静で、それが一層の悲哀を感じさせた。

「ただ」

言つと侘助はくるりと振り返る。僅かに悲しさを含んだ喜市の目を見据えたその顔は、気のせいかはにkind様に口許をゆがませた子供らしい顔に見えた。

「嫌いなわけでは無い」

言い捨てるようにして七輪の前にすくと座ると、さつきと変わらず白湯を啜る侘助と侘助の言葉に、喜市はどこか諦めにも似た安堵を感じていた。

人の気持ちと同じように、自分の手の内にあることでは到底ない。それでも確実にそれは息づいていて、会えぬほどに喜市はそれに焦がれ続けるだろうと思った。

その気持ちに限り無く近いものに、心当たりがあった。

「片恋だな」

独り言を言うように呟いて喜市は笑った。

人でないものの存在に安堵をしても、彼らが人と関わることを「必要としない」と思っているという事実は、ただひたすらに切なくさせた。それが、自分たちが気づかず彼らを虐げたせいだということも。

喜市は侘助の向かいに座り、少し温くなった白湯を手にし、一口飲む。

「侘助。暖かくなるまでいたら良い。それぐらいしか出来ねえが」

「お前が悪いわけではない」

言葉尻を打ち消して言葉を継いだ侘助は、気のせいかな少しだけ微笑んだような気がした。

「それに、お前は好きだ。面白い。」

唐突な言葉に、思わず喜市は声を上げて笑った。

おそらく、照れていた。不思議な片恋もあるものだと、おかしくもあった。

すると瞬間、ぴしゃりと凄い勢いで戸が開いた。

何事かと二人は驚いて振り返ったが、直ぐさま喜市の方は頭を抱えてうなだれてしまった。

「喜市、油断したねえ」

そこには仁王立ちでにやりと笑う先ほどの声の持ち主である、狸の大将のような女がいた。

すっかり邁ってうなだれる喜市に、侘助は初めて、声を上げて笑った。

その六

少し陽の射す午後、喜市は件の女の少し後ろをゆったりと歩きついていた。

その脇には、喜市の手ぬぐいを首に巻いた侘助が、これもまたゆったりと歩いている。

何度か女は急かしたのだが、荷物が重いのと天気が良いのと足元がぬかるむもので、二人の足はなかなか早まらず、とうとう諦めたようだった。

しかし本当のところは、長屋からはもう一刻近く歩き続ける必要があるほど遠くまで来たので、実際はこれ以上速く歩けば侘助が辛かろうと喜市が歩みを緩めていたのもあった。

二人は特に話さなかったが、お互いに陽気に似合う穏やかな沈黙が気にいったらしく、それぞれの口の端は同じように僅かに天を指している。

冷たく固かった空気の間を午後は懸命に日差しが縫い、朝の寒さとは打って変わって暖かい。その麗らかな温もりを感じ、喜市は未だ遠い春をふと恋しく思った。

その時ふいに、何かの香が喜市の鼻先をかすめた。

微かだが、何故か魅かれる匂いに、喜市は先に行く女を呼び止め聞いた。

「おつかさん。この匂いはなにかねえ」

女は遅い歩みに不機嫌な様子で顔をしかめて振り返ると、二三度鼻でひくと嗅いだが

「匂いなんかするもんか」

と直ぐにふいと鼻先で弾くように前を向いてしまった。

気にせず匂いの記憶を探る喜市に、斜め下から声がかかる。少しだけ、小さな口から白く染まった空気がもれてにじんでいく。

「藤の花だ」

侘助はそう言いきよきよと辺りを見回すと、少し先の寺の境内にある木を指差した。

「あれだ。」

侘助は言うが、その木に花は一向に見当たらない。それもそのはずで、藤の花には未だ時期が早すぎるのだ。

「まだ咲いておらぬよ」

訝しげに喜市は言ったものの、確かにそう言われてみれば藤の香りにしか思えず、小首をかしげると、侘助が再び口を開いた。

「今日は少し暖かいからな。藤も早く目覚めて春の備えでもしておるのだろ。あれは名士だからな」

「それならさしずめ恋文の練習かい。可愛いねえ。」

喜市はふつと笑うと、足を止めてじつと慈しむようにその木を見つめた。追い越した侘助はそれに気付き、ゆっくりと足を進めながらも振り返る。

「怒られるぞ」

しかしそう言う侘助の忠告などちくとも気に掛ける様子など見せず、喜市は思い付いたようにかしげた首を戻して腕組みを解くといきなり

「春の日を 待つ身の上に 流る香は 姿隠せど 藤の花なり」

とさも難しい歌を詠み上げる様に口にした。

満足げに微笑む喜市に

「もう春だろ」

と侘助は口を挟んだが、喜市は微笑んだまま

「こいつが上手く咲いた時が春だよ。どんな恋文をくれるのかねえ」と言って、再びすたすたと歩き出してしまった。侘助は慌てて追いかけて、横に並ぶ。

見上げると、さっきまでの自慢げな笑顔はどこへやら、もう春だと指摘されたのが恥ずかしかったと見えて、喜市は少し照れた風に眉を下げていた。

「俺の秘密を教えるよ。歌を詠むのは苦手だね」

まじまじと覗き込む侘助をちらりと見ると、そうこつそりと囁いた。侘助は笑うでもなく目線を通りに戻すと

「俺は嫌いじゃない」

と口にした。

喜市は予想もしなかった言い草に驚いて足を止め、その小さな体に目をやったが、侘助はさっきの喜市と同様にちつとも気に止めない様子で黙々と先に進んでいる。

「なあ、侘助。お前の秘密も一つ教えておくれよ」

僅かに浮つく心持で思いついたように喜市が言うつと、侘助も足を止めて少し考えた。

そうしてくるりと振り返り、その何を考えているのかわからぬまんなるの目で何度か瞬きした。

「貉と狐の中の悪い理由を知っているか」

喜市が知らぬと答えると、侘助は少し得意げに口にした。

「昔、双方のご先祖が同じ人間の女を好きになったからだ」

言うつと侘助はまた踵を返して行ってしまった。

「それだけか」

嘘か本当か検討がつかぬ答えに問いかければ、再び小さな歩みを止める。

「それだけだ。加えるなら、だから狐も貉もいがみ合うが、人間は嫌いじゃない」

振り返ることもなく、ただぶつきらばうに付け加えられた言葉に、喜市はおそらくそれが言い伝えに過ぎないものであることがうつ

すらとわかったが、侘助においては人間がむしろ好きなのだ、と言うことだけはつきりとわかった。むしろ真偽の程はこの際どうでも良く、それだけで十分であった。

再び沈黙を取り戻した喜市は穏やかな笑顔でその小さな体に追いつくと、並んで通りの中へ消えていった。

喜市の家に、小さな着物が増えるのは、これから直ぐの話。

その六（後書き）

「春の日を 待つ身の上に 流る香は 姿隠せど 藤の花なり」

和歌なんぞ詠んだことないので乱暴ですが、

「待つ身」と「松見（藤の花の異称）」、「藤」と「不二」を掛けたり「隠す」を二つの意味で使ったり、精一杯頑張ってみました。

本当は友人の書いた小説とのコラボ用だったので、もっと沢山掛けたのですが、ここでは割愛します。

「雪解けの足跡」読んでくださいますと、本当に有難う御座いました！

シリーズはまだまだ続きます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5270k/>

雪解けの足跡・

2010年10月11日04時54分発行